

令和8年(2026年)3月12日

テーマ展「^{つば}鐔^{ぎこう}とりどり^{いしやう}一技巧と^{すい}意匠の粹^{すい}」を開催します

このたび、彦根城博物館において、みだしの展覧会を開催いたしますのでお知らせします。

記

1 展覧会名称

テーマ展「^{つば}鐔^{ぎこう}とりどり^{いしやう}一技巧と^{すい}意匠の粹^{すい}」

2 会 期

令和8年(2026年)3月19日(木)～4月20日(月) *会期中無休

開館時間：午前8時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

3 会 場

彦根城博物館 展示室 1

4 展示の趣旨

^{つば}鐔は刀の装具の一つです。刀身と柄^{つか}の境に装着することで刀の重心を整え、柄を握る手が滑ることを防ぐ働きを担います。また、相手の攻撃の盾^{たて}となって手を保護する役割をも担っています。鐔の歴史は古く、現在確認される最も古い形は、古墳時代^{たち}の大刀鐔にまで遡ります。奈良時代の唐大刀^{からたち}、平安時代の太刀^{たち}、室町時代に現れた打刀^{うちがたな}など、刀の形態の変遷に伴って、これに装着する鐔の形も変化しました。

鐔が大きく発展したのは室町時代です。この頃、騎馬戦から密集隊形の徒歩戦へと戦闘形態が変化し、弓に代わって刀や槍の使用が盛行しました。これに歩調を合わせ、腰に下げて着用する太刀の代わりに腰に差して用いる打刀が新たに誕生し、これが以後の刀の主流となります。そして、その装具である打刀鐔の制作も盛んになりました。定型的な様式美が追求された太刀鐔と異なり、打刀鐔では、多様な需要層の嗜好を反映して、多彩な意匠が追求されました。

打刀鐔は、簡素な丸形の鉄板鐔^{こすかしもん}に始まり、これに小透文^{すかしつば}をつけた透鐔^{すかしつば}が生まれました。一方で、高彫り^{たかぼ}や毛彫り^{けぼ}を施した太刀鐔の影響を受けた、より精緻な彫文様の打刀鐔も生まれました。鐔の素材も、鉄の他に、銅や金、銀の合金などが用いられるようになり、文様表現でも、色絵^{いろえ}や象眼^{ぞうがん}などのより高度な技法が駆使されるようになります。

室町時代前期頃までは、鐔の制作は甲冑師や刀匠が余技的に行っていたとされますが、室町時代中期になると、鐔専門の金工も現れました。美濃の金工集団が、高肉彫りの力強い彫法で文様を表し、鐔を飾ったのもこの頃です。桃山時代には、埋忠明寿などの名工が輩出し、鐔の芸術性を一挙に高めたと言われます。江戸時代には、美濃出身の後藤祐乗を祖とし、装剣金工の宗家として代々為政者に仕えた後藤家が、将軍家はもちろん、大名家にも重用されました。江戸時代中期になると、各地で諸派が繁栄し、彦根でも喜多河宗典の一派が生まれ、彦根彫りと呼ばれた濃密な高彫り意匠で一世を風靡しました。

本展では、井伊家伝来品を中心に、鐔の優品が一堂に会します。藩主所用の指料を彩った埋忠明寿の作、喜多河宗典晩年の逸品など、鐔愛好家垂涎の名品も登場します。掌に収まるような小さな鐔。その一つ一つにあしらわれた精緻な技と、時に大胆、時に繊細な意匠の数々をご堪能ください。

5 展示作品

42件（別紙リストのとおり）

6 観覧料

一般 700円(560円)

小・中学生 350円(280円) ()内は30名以上の団体割引料金

*常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

7 関連事業

ギャラリートーク

日時：令和8年(2026年)3月21日(土) 午後2時～ *30分程度

会場：彦根城博物館 展示室1

講師：今中啓太（当館学芸員）

その他：観覧料が必要

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当：今中 啓太

電話：0749-22-6100

E-mail：museum@mx.hikone.ed.jp

テーマ展「鐺とりどり—技巧と意匠の粋—」展示作品リスト

番号	作品名称	銘	数量	時代	所蔵
鐺鑑賞入門					
1	鉄地鋤下彫勝虫透鐺	表「山吉兵」	1枚	室町～江戸時代	個人
2	鉄地鋤下彫花菱花形紋透鐺		1枚	室町～江戸時代前期	本館（井伊家伝来資料）
3	赤銅磨地大小鐺		2枚	江戸時代初期	本館（井伊家伝来資料）
4	赤銅地変り八角形大小鐺		2枚	桃山～江戸時代初期	本館（井伊家伝来資料）
5	鉄地生花透鐺	表「江州記内」	1枚	江戸時代初期	本館（小笠原信夫氏寄贈資料）
鐺百姿					
6	黒漆塗鞘打刀拵		1腰	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）
7	赤銅魚子地木瓜形高彫橘紋・ 赤銅魚子地喰出形高彫橘紋大小鐺		2枚	江戸時代前期	本館（井伊家伝来資料）
8	赤銅魚子地金象嵌橘紋大小鐺	(大) 表「稲川直克（花押）」 (小) 裏「稲川直克（花押）」	2枚	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）
9	赤銅魚子地金象嵌橘紋葵鐺		1枚	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）
10	鉄地菊花形透鐺		1枚	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）
11	鉄地角形扇面透鐺	表「武江住正定」	1枚	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）
12	鉄地色絵鶴透大小鐺		2枚	江戸時代中～後期	本館（井伊家伝来資料）
13	鉄地高彫金象嵌竹に虎鐺		1枚	江戸時代中～後期	本館（井伊家伝来資料）
14	鉄地高彫破れ格子に菊花透鐺	表「武州住正次作」	1枚	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）
15	四分一地高彫葡萄栗鼠・枇杷栗鼠透大小鐺	(大) 表「長州幸登図石黒政常（花押）」 (小) 表「長州幸登図石黒政常（花押）」	2枚	江戸時代中～後期	本館（井伊家伝来資料）
16	赤銅魚子地色絵金象嵌宇治川先陣図二所物	小柄裏「後藤光孝（花押）」	1組	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）
17	赤銅魚子地色絵金象嵌楽器図二所物	(大) 小柄裏「紋程乗光美（花押）」 笄裏「紋程乗光美（花押）」 (小) 小柄裏「紋簾乗光晃（花押）」 笄裏「紋簾乗光晃（花押）」	2組	江戸時代前～中期	本館（井伊家伝来資料）
18	赤銅魚子地金覆輪高彫色絵金象嵌舞楽図・ 赤銅魚子地金覆輪高彫武者図鐺		2枚	江戸時代中～後期	本館（井伊家伝来資料）
19	赤銅鑢地金覆輪変り八角形大小鐺	表「埋忠」	2枚	江戸時代前期	本館（井伊家伝来資料）

20	鉄地鋤彫金象嵌流水に鯉図鐺	表「安親」	1枚	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）
21	赤銅地肉彫色絵金梨地象嵌松帆に千鳥図鐺	表「大森英秀」	1枚	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）
22	赤銅魚子地金銀象嵌毛彫扇面散図鐺	表「柳川直政（花押）」裏「赤尾吉次」	1枚	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）
23	赤銅魚子地薄肉彫七五三縄図鐺	表「江川宗義（花押）」	1枚	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）
24	真鍮地高彫片切彫色絵金象嵌鍾馗図鐺	表「利周作」	1枚	江戸時代中～後期	本館（個人寄贈資料）
25	鉄地薄肉彫線象嵌水草に源氏車図鐺	表「播州明石住埋忠重義」	1枚	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）
26	鉄地金覆輪薄肉彫金象嵌帆船図鐺	表「長州萩住河治六郎右衛門作」	1枚	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）
27	鉄地金布目象嵌秋草図鐺	表「阿州住勝吉作」	1枚	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）
28	鉄地薄肉彫金象嵌龍図鐺	表「若芝」	1枚	江戸時代中～後期	本館（井伊家伝来資料）
29	赤銅皮皺地金銀素銅色絵桐菊紋散図鐺	裏「一乗門人熊谷義次（花押）」	1枚	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）
30	鉄地高彫雲龍図鐺	表「小杉元次（花押）」	1枚	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）
31	赤銅魚子地金覆輪高彫色絵武者合戦図大小鐺	（大）表「藻柄子喜多河入道宗典製（花押）」裏「江州彦根住」 （小）表「藻柄子入道宗典行年七十三歳製之」裏「江州彦根住喜多川」	2枚	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）
32	鉄地金覆輪高彫色絵金象嵌十二支図鐺	表「藻柄子宗典」裏「江州彦根住」	1枚	江戸時代中期	本館（個人寄贈資料）
33	鉄地色絵金象嵌竹林七賢人透鐺	表「藻柄子入道宗典製」	1枚	江戸時代中～後期	個人
34	鉄地色絵金象嵌唐人物透大小鐺	表「藻柄子吉川益胤」裏「江州彦根住」	2枚	江戸時代中期	本館 （足輕吉川仙之介家伝来資料）
35	鉄地高彫金象嵌桐鳳凰透大小鐺	（大）表「玄珠子往永作」裏「江州彦根住享和元西二月」 （小）表「玄珠子往永作」裏「江州彦根住享和元歳」	2枚	享和元（1801）年	個人
36	鉄杣目地四つ輪違透鐺	表「松柏堂砂川正吉（花押）」	1枚	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）
37	赤銅素銅地屈輪彫唐草紋大小鐺	（大）表「高橋正次（花押）」 （小）表「高橋正次（花押）」	2枚	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）
38	赤銅地毛彫色絵象嵌波に蛸・波に海獣図昼夜鐺	波に海獣図面「井関八左衛門作」	1枚	江戸時代中～後期	本館（井伊家伝来資料）
39	銀地毛彫色絵象嵌波に三日月図鐺	裏「月光美（花押）程乗」	1枚	江戸時代中～後期	本館（井伊家伝来資料）
40	赤銅地毛彫高彫金象嵌双龍透鐺	表「阿部光国（花押）」	1枚	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）
41	銀磨地銀象嵌雪華紋散・金象嵌桜図大小鐺	（大）表「鎌田乗壽（花押）」 （小）表「鎌田乗壽（花押）」	2枚	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）
42	緋色銅魚子地鋤下彫「行光」字・「長守」字大小鐺		2枚	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）

写真解説

1 鉄地生花透鐔 1枚 (作品リストNO.5)

銘表「江州記内」

直径：8.3cm

江戸時代初期

本館蔵 (小笠原信夫氏寄贈資料)

梅の枝を桶に生けた文様を表した鉄地丸形鐔。地を裏まで彫り抜いて文様を表す、透彫の技法が使われています。梅花は花卉の内側が彫り下げられ、立体的に表されています。梅の枝は緩やかに垂れています。透彫で自然な曲線が表されている点に技術の高さがうかがえます。

銘にある「記内」は、桃山から江戸時代初期に越前国を拠点にした金工師一派です。本作はその初代の作と見られます。初代記内は近江国から越前へ移住したと伝えられ、「江州記内」の銘を持つ本作は、記内が近江で制作していたことを裏付ける重要な資料です。



2 赤銅魚子地木瓜形高彫橘紋・ 赤銅魚子地喰出形高彫橘紋大小鐔 2枚 (作品リストNO.7)

(大) 縦径：7.8cm 横径：7.8cm (小) 縦径：5.4cm 横径：3.6cm

江戸時代前期

本館蔵 (井伊家伝来資料)

井伊家初代直政 (1561～1602) 所用とされる黒漆塗大小拵に附属する大小の鐔。大の鐔は木瓜形と呼ばれる、鐔の中でも多く見られる形です。小の鐔は喰出形と呼ばれる形で、短刀拵に多く用いられます。大小ともに銅に金や少量の銀を加えた合金である赤銅で作られています。井伊家の家紋である丸に橘紋は、地を彫り下げて浮き出させ、彫り下げた地には魚子と呼ばれる細かな粒状の模様を密に整然と表しています。小の鐔は、橘紋が側面に表されており、丸みのある立体的な場所に彫りを施すという高度な技術が駆使されています。

本作に表される橘紋は、他の井伊家伝来資料の多くに見られる形と異なり、橘の実がふっくらと丸みを帯び、枝も柔らかくカーブしており、家紋が定型化する以前の形を示していると考えられます。



3 ^{し ぶ い ち じ た か ぼ り ぶ だ り す び わ り す す か し だ い し ょ う つ ば} 四分一地高彫葡萄栗鼠・枇杷栗鼠透大小鐺 2枚 (作品リストNO. 15)

銘(大)表「長州幸登図 石黒政常(花押)」

(小)表「長州幸登図 石黒政常(花押)」

(大)直径: 8.2cm (小)直径: 7.6cm

江戸時代中～後期

本館蔵 (井伊家伝来資料)

銅と銀の合金である^{し ぶ い ち}四分一を地とし、大^{ぶ だ り す}は葡萄に栗鼠図、小は^{び わ}枇杷に栗鼠図を^{す か し ぼ り}透彫で表した鐺。高彫、毛彫の技術を用いて写実的に図様を表現しています。彫りの高低差で前後の奥行きを表している点や栗鼠の毛並みを細かな線を刻んで表している点に高い金工技術がうかがえます。

銘から作者と判明する石黒政常は、江戸時代後期に主に江戸で活躍した^{や な が わ}柳川派の門人

人で、本作のような写実的な表現を得意としました。また、銘に「長州幸登図」と記されることから、長州萩藩毛利家お抱えの金工師である、^{ゆ き た か}中原幸登の図案を元に作られたことがわかります。



4 ^{し ゃ く だ ょ う な な こ じ き ん ふ くり ん た か ぼ り い ろ え む し ゃ か つ せ ん す だ い し ょ う つ ば} 赤銅魚子地金覆輪高彫色絵武者合戦図大小鐺 2枚 (作品リストNO. 31)

銘(大)表「藻柄子喜多河入道 宗典製(花押)」裏「江州彦根住」

(小)表「藻柄子入道宗典 行年七十三歳製之」裏「江州彦根住喜多川」

(大)直径: 8.2cm (小)直径: 7.9cm

江戸時代中期

本館蔵 (井伊家伝来資料)

武者と鬼などの異形の者が戦いを繰り広げている様を表した鐺。高彫の技法で人物等の形態を浮き上がらせ、さらに色絵の技法で金と^{す あ か}素銅色の色どりを加えています。人物の表情や動き、馬の動きなどもそれぞれ異なっており、高い金工技術がうかがえます。

銘に記されている^{き た が わ そ う て ん}喜多河宗典は、彦根の中藪に住んだとされる江戸時代中期の金工師です。その鐺は、江戸を中心に全国で人気を博しました。宗典は、高彫で濃密な図を表す作風を得意とし、宗典派の作は彦根彫と呼ばれました。



5 ^{しやくどうじ けぼりいろ えぞうがんなみ たこ なみ かいじゆう ずちゆう やつば} 赤銅地毛彫色絵象嵌波に蛸・波に海獣図 昼夜鐺 1枚 (作品リストN0. 38)

銘 波に海獣図面「井関八左衛門作」

縦径：8.7cm 横径：8.1cm

江戸時代中～後期

本館蔵 (井伊家伝来資料)

6 ^{ぎんじ けぼりいろ えぞうがんなみ み かづき ずつば} 銀地毛彫色絵象嵌波に三日月図鐺 1枚 (作品リストN0. 39)

銘 裏「月光美 (花押) 程乗」

直径：7.0cm

江戸時代中～後期

本館蔵 (井伊家伝来資料)

井伊家12代直亮^{なおあき} (1794～1850) 所用と伝わる大小拵に附属する鐺。大の鐺は一方の面に金色^{いろえ}絵地波に蛸図、もう一方の面に赤銅地に波に海獣図を表した鐺です。両面ともに地に毛彫で波を、象嵌で文様を表しています。本作のように鐺の両面を対照的な色使いで表し、両面を表として使用できる意匠のものは、^{ちゆう やつば}昼夜鐺と呼ばれます。

小の鐺は、銀地で波に三日月図を表しています。大の鐺と同じく毛彫で波を表し、右上に銀象嵌に金色絵を施して月を表しています。

本作が附属する拵は、^{かいらぎ}梅花皮鮫と呼ばれるエイの皮で作られた拵です。同拵の目貫^{めぬき}や縁^{ふち}にも魚、舟などの水辺にまつわる意匠が表されており、全体が海にまつわる意匠で統一されています。



5 赤銅地波に海獣図面